

アジア・アフリカ言語文化研究所  
東京外国語大学

要覧 1991



目 次

研究所の改組にあたって……………1

概 要

歴史と性格……………2

研究部門構成……………4

組織……………6

職員……………8

研究活動

共同研究プロジェクト……………10

国際学術交流……………19

助手等の現地投入……………22

共同研究員（公募）……………23

研究生……………23

言語文化情報の統合化……………24

言語研修……………25

施 設

電算機室……………26

図書室……………27

音声学実験室……………28

出版物一覧……………29

—表紙写真説明—

社会主義革命から十数年を経た現在でも、エチオピア正教会は、多くのエチオピア人にとって心の拠り所である。この写真は、正教における最大の祭礼のひとつであるマスカル（十字架の意）の一情景で、冠をかぶって正装した僧や銀の十字架が写っている。

マスカルは、グレゴリオ暦では毎年9月27日に、アディス・アベバ中心部にある聖ギオルギス教会前の広場で、教皇臨席の下に行われる。この季節は、エチオピア暦では新年にあたり、雨季が終り、乾季が始まる季節でもある。祭礼のクライマックスでは、大きな焚火のまわりを、男女が太鼓のリズムにあわせて乱舞する。その後、市内各所の街角でも小さな火が焚かれ、人々は朝まで踊り明かす。この祭礼には、キリスト教以前の古代ヘブライの影響が色濃くみられるといわれている。

(栗本英世)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES  
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA  
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

4, NISHIGAHARA, KITAKU, TOKYO 114

TEL. 03-3917-6111

FAX. 03-3910-0613

Cable Address: GENGOBUNKA TOKYO

## 研究所の改組にあたって

昭和39（1964）年に本研究所が設立されて、すでに27年が経過しました。研究所に活気があるのは、発足後10年間くらいである、と聞き及んでいます。

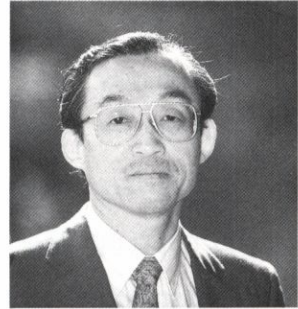
周囲の人びとの暖かい目に見守られ、どんなことでも実現できるような幻想を抱くことの許された幼児期を過ぎ、周囲の見る目が厳しくなり、将来の可能性の限界が少しずつあらわになりながらも、なお身分不相応な夢をもつことができた10代をあとに、もはや夢などを語るのがおのずから面映ゆい20代を、ほぼ走り過ぎてしまおうとしています。

徐々に、しかし確実に初期の活力が失われていくなかで、青二才といわれる立場でもなし、かといって円熟の域に達するにはほど遠い現状を冷静に認識し、次の10年、21世紀に向けて、共同利用研究所として本研究所の果たすべき役割を、ここ何年にもわたって、論議しつづけてきました。その結果、最新の情報処理技術を最大限に活用して、広く学界と社会の要請に応え、近年のアジア・アフリカ地域の激しい政治的、社会的変化に研究上で即応していくためには、大部門制をとることが不可欠である、との結論に達しました。

本年度より研究所は、従来の16部門・1客員部門（外国人）の小部門制を大きく改組して、「言語文化基礎」、「言語文化情報」、「広域言語文化第一」および「広域言語文化第二」の4大研究部門、1外国人客員部門となりました。

夢を語れなくなったときが、研究所の死ではないでしょうか。所員の増員3名（うち1名は外国人客員）を伴って実現した今回の改組によって、本研究所は自信をもって、ふたたび21世紀に向けて夢を語るできるようになりました。所員、職員一同、わが国のアジア・アフリカ研究の進展に微力を尽くす決意を新たにしています。

改組の必要性をご理解いただき、ご支援いただいた方がたに心よりお礼を申し上げますとともに、今後の一層のご鞭撻をお願いするしだいです。



所長 上岡弘二

所長 上岡 弘二

# 概 要

## 歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。共同利用研究所の使命とは、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者のために設備や資料を提供し、相互の接触や交流の機会をつくり、それによって研究の進展を促すことです。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに、昭和36(1961)年に日本学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設置するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、昭和39(1964)年4月1日に、東京外国語大学附置の共同利用研究所として本研究所は設立されることになりました。

本研究所の設置目的は、アジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、これらの地域における諸言語の辞典編纂、および教育訓練をおこなうことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの諸言語、およびそれらを通じて、アジア・アフリカ諸地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語修得を助けるため、言語研修を実施すること。

設立時にはわずか3部門で発足した本研究所でしたが、以来、整備拡充に努力し、昭和62(1987)年には16部門・1客員部門(外国人)の研究所に成長しました。

しかしながら、人文・社会科学分野では、たとえば、言語学、歴史学、人類学など、すでに確立している学問体系に依存した個別的な研究をのり越えた新しい学問・理論構築への要請が高まっています。学界におけるこうした機

運は、近年における国際化、地域の枠組みの流動化、民族・宗教問題の激化、都市化現象の進展などの急激な世界情勢の変化および狭い地域的枠組みにとらわれない、より広域な視野にもとづく研究の必要性に対する認識の深まりなどに関連しています。一方、最近における情報処理技術の発達の中かで文字のみならず、音声や画像の処理が可能になり、さらに、これらを個別の情報としてではなく、一つの情報ネットワークに統合化する研究が進展しています。

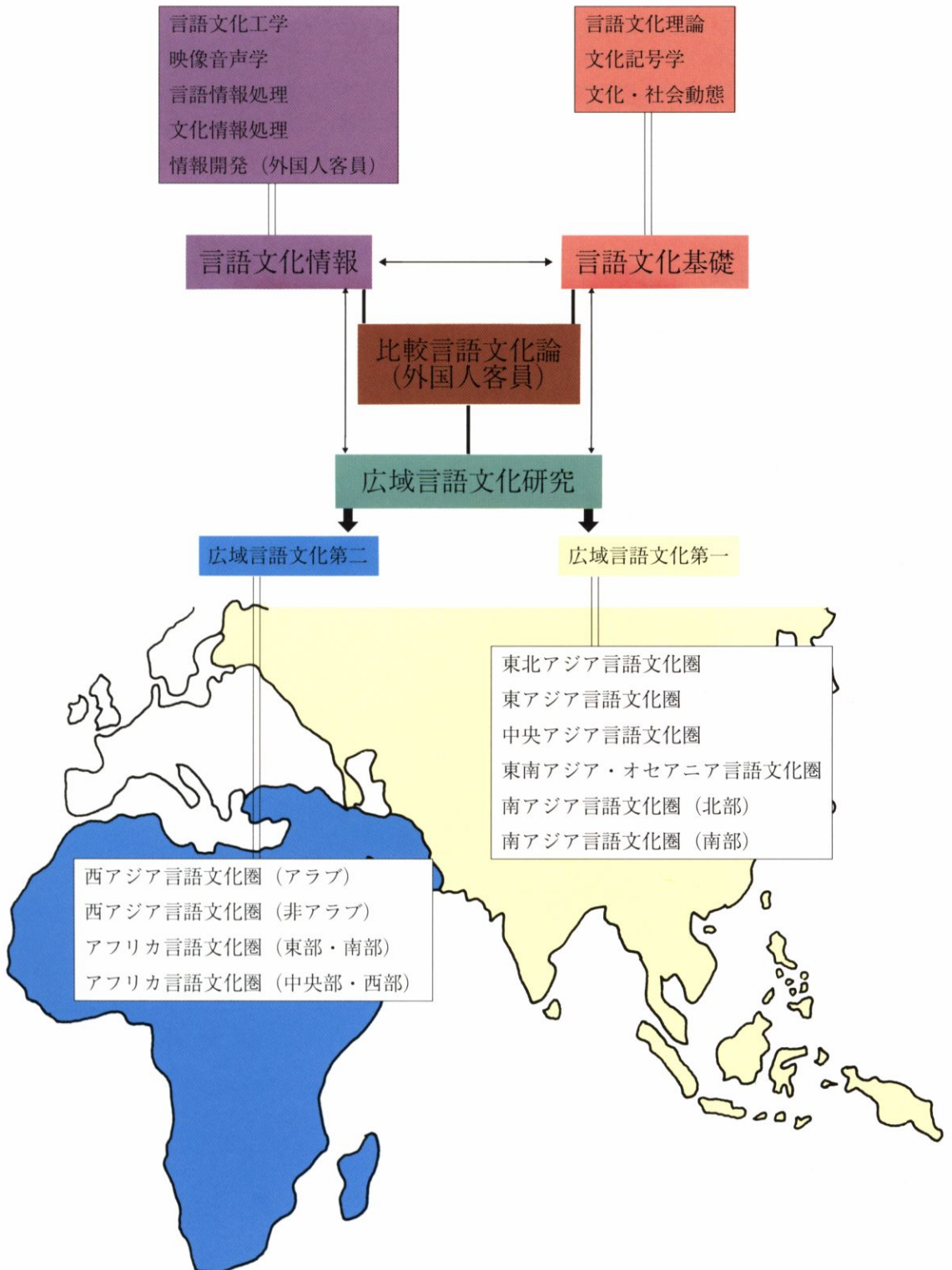
本研究所は、以上のような学問的・社会的要請、アジア・アフリカ地域の社会情勢の変化、科学技術の発達に対応して、言語を媒介として成立している文化を総合的に研究する学問である「言語文化学」理論の構築、広域的なフィールドワークや共同研究の実施、情報の統合化処理のための理論と方法の開発などをめざして、平成3(1991)年度より、従来の16小部門・1客員部門(外国人)を、4大研究部門・1客員部門(外国人)に再編成しました。3年後に設立30周年をひかえ、わが国における言語文化研究の発展になお一層貢献し、かつ流動する世界情勢にすみやかに対応しつつ、わが国とアジア・アフリカ諸国との文化交流にさらにより積極的に寄与することが、本研究所所員一同の願いです。



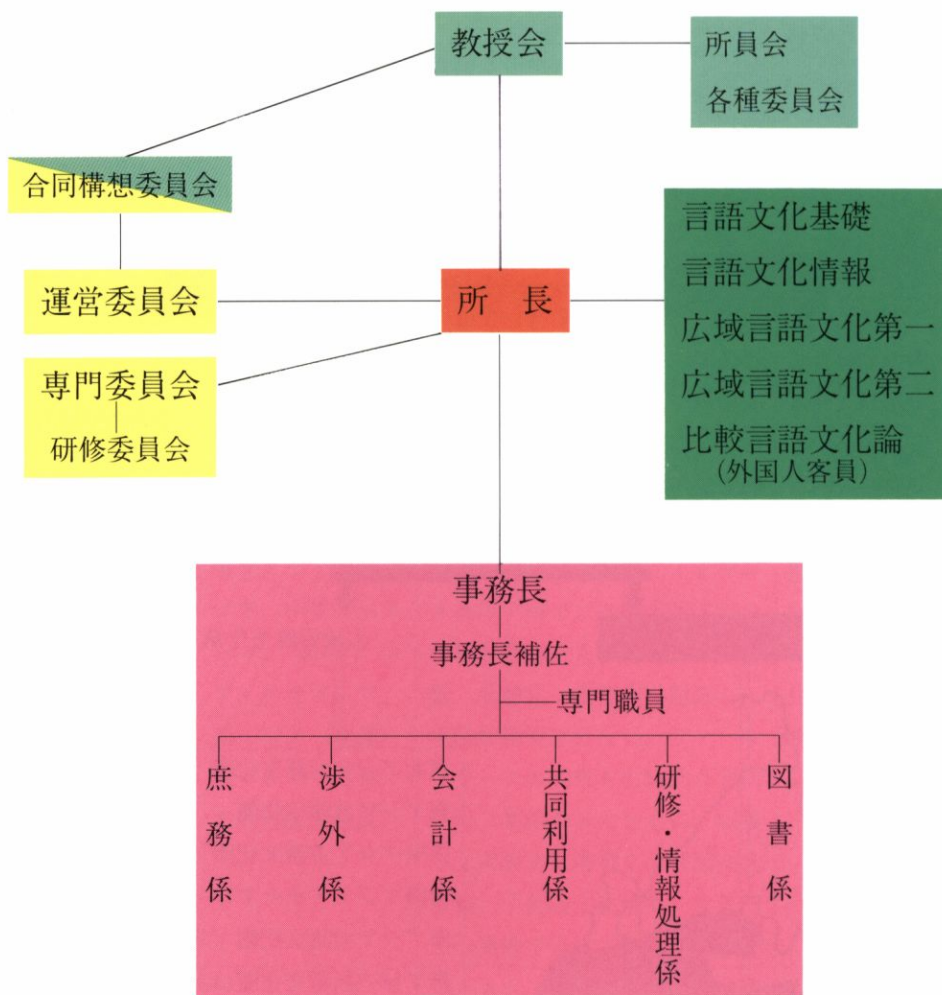
## 研究部門構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学, 文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	川田, 家島, 山口 新谷, 水島, 高知尾, 中沢
言語文化情報	言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理 情報開発 (外国人客員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, 及び情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。	上岡, 坂本, 奈良 加賀谷, 中嶋, 林 新免, 峰岸  外国人研究員
広域言語文化 第一	東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア, 東南アジア・オセアニア, 南アジア (北部), 南アジア (南部) の各言語文化圏	東は沿海州より西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究を行ない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	池端, 石井, 梅田 大江, 岡田, 中村 ダニエルス, 内藤 中見, 松村, 宮崎 森, 栗原, 根本, 三尾
広域言語文化 第二	西アジア (アラブ), 西アジア (非アラブ), アフリカ (東部・南部), アフリカ (西部・中部) の各言語文化圏	イスラム, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究を行ない, フィールドワークの成果を広域的共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する	永田, 中野, 日野 守野, 梶, 羽田, 松下, 栗本, 黒木 西尾
比較言語文化論 (外国人客員)		言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者 (特にアジア・アフリカ諸国) を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。	成百仁, M. R. Nasiri, Nai Pan Hla, J. Norman

動的なアジア・アフリカ言語文化学の構築をめざす研究部門構成図



# 組 織



(1991年4月12日現在)

区分	教授	助教授	講師	助手	その他の職員	計
定員	(4) 17	17	0	8	28	(4) 70
現員	(3) 16	14	0	10	28	(3) 68

( )は外国人客員数を外数で示す



## 運 営 委 員 会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての本来の機能を適切に遂行するため、これとは別に運営委員会がおかれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第14期（1991.1～1993.2）の運営委員は現在以下の通りです。

池 田 修	大阪外国語大学教授	祖父江 孝 男	放送大学教授
池 端 雪 浦	所 員		(国立民族学博物館名誉教授)
石 井 米 雄	上智大学教授 (京都大学名誉教授)	谷 泰	京都大学教授
伊 谷 純一郎	神戸学院大学教授 (京都大学名誉教授)	土 田 滋	東京大学教授
梅 田 博 之	所 員	長 島 信 弘	一橋大学教授
應 地 利 明	京都大学教授	中 根 千 枝	東京大学名誉教授
大河内 康 憲	大阪外国語大学教授	西 田 龍 雄	京都大学教授
川 田 順 造	所 員	本 田 實 信	名古屋商科大学教授 (京都大学名誉教授)
神 田 信 夫	明治大学教授	護 雅 夫	中近東文化センター理事長 (東京大学名誉教授)
北 村 甫	麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	矢内原 勝	作新学院大学教授 (慶応義塾大学名誉教授)
古 賀 正 則	一橋大学教授	山 崎 利 男	東京大学名誉教授
輿 水 優	東京外国語大学教授	渡 部 忠 世	放送大学教授 (京都大学名誉教授)
佐々木 高 明	国立民族学博物館教授		
鈴 木 斌	東京外国語大学教授		

### 合同構想委員会

本委員会は、所長、運営委員会委員5名および教授会構成員4名で組織され、教授会・運営委員会から研究所運営の基本方針に関する重要事項について審議を付託されたときに協議をおこないます。現在の委員は以下の通りです。

上岡弘二（所長）、石井米雄、神田信夫、谷泰、西田龍雄、本田實信、池端雪浦、梅田博之、川田順造、永田雄三（所員）

## 専 門 委 員 会

所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1991年度の委員は以下の通りです。

### 研修委員会

池田修、大河内康憲、大東百合子（明海大学副学長）、小澤重男（東京外国語大学名誉教授）、北村甫、輿水優、柴田紀男（天理大学教授）、鈴木斌、土田滋、西田龍雄

# 職 員

所長（兼任） 上 岡 弘 二

## 教 授

池 端 雪 浦：フィリピン史における政治と宗教

石 井 博：南アジアの人類学

梅 田 博 之：朝鮮語

大 江 孝 男：朝鮮語

岡 田 英 弘：東アジア史

上 岡 弘 二：イラン語、イスラムの民間信仰

川 田 順 造：アフリカ文化

坂 本 恭 章：オーストロアジア諸語

永 田 雄 三：トルコ史

中 野 暁 雄：アフロ・アジア諸言語およびその民族誌

中 村 平 次：南アジア現代史

奈 良 毅：インド・アリア諸語

日 野 舜 也：アフリカ都市社会の比較研究

守 野 庸 雄：日本語・スワヒリ語対照研究およびス・ス辞典編纂

家 島 彦 一：インド洋・地中海の海域史に関する基礎的研究

山 口 昌 男：文化記号論



対空機銃の陣地の横を通って、10年ぶりに訪ねたクルド人のバフラミー一家。主人は不在であったが、歓待を受けた。当時まだ娘のようである姿を見せなかった夫人は、すでに、5人の子持となっていた。（イラン・パーフタラーン州上チャンバターン村にて、1990、秋。上岡弘二）

## 助 教 授

加賀谷良平：音響音声学、アフリカ諸言語

梶 茂 樹：バンツー諸語、言語人類学

新 谷 忠 彦：言語哲学

クリスチャン・16～20世紀中国史における社ダニエルス・会、経済および技術

内 藤 雅 雄：インド近・現代史

中 嶋 幹 起：漢語

中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史

羽 田 亨 一：サファビー朝文化史研究

林 徹：トルコ語

松 下 周 二：アフリカの言語

松 村 一 登：フィン・ウゴル諸語

水 島 司：南インド近・現代史

宮 崎 恒 二：オーストロネシア諸社会の研究

森 幹 男：インドシナ比較文化史

## 助 手

栗 原 浩 英：ヴェトナム現代史

栗 本 英 世：東・北東アフリカの人類学

黒 木 英 充：東アラブ近・現代史

新 免 康：中央アジア近・現代史

高 知 尾 仁：世界表象と象徴性

中 澤 新 一：チベット仏教の人類学的研究

西 尾 哲 夫：アラビア語・アラブ文化

根 本 敬：ビルマ近・現代史

三 尾 裕 子：東アジアの人類学

峰 岸 真 琴：オーストロアジア諸言語

事務長 山本唯雄  
 文部事務官  
 事務長補佐 鈴木邦叔  
 文部事務官  
 専門職員 谷津成洪  
 文部事務官

庶務係

係長 福井光雄  
 文部事務官  
 文部事務官 元井洋一  
 文部事務官 高橋由紀  
 文部技官  
 (自動車運転手) 伊藤功一

会計係

係長 山本芳久  
 文部事務官  
 文部事務官 田中鉄哉  
 文部事務官 藤崎英朗  
 文部事務官 岡田健一  
 用務員 植田カツエ

研修・情報処理係

係長 平井榮治  
 文部事務官  
 主任 今井健二  
 文部技官  
 文部事務官 中嶋弘子  
 文部事務官 山口登之

渉外係

係長 佐久間敬喜  
 文部事務官  
 主任 神田環  
 文部事務官  
 文部事務官 谷川かつ子

共同利用係

係長 浅見義則  
 文部事務官  
 主任 金井京子  
 文部事務官  
 文部事務官 津田貞子

図書係

係長 佐藤剛  
 文部事務官  
 主任 中川陽子  
 文部事務官  
 文部事務官 鈴木喜久子  
 文部事務官 須郷知子  
 文部事務官 斉藤眞一郎



夏休みのコーラン学校。結構楽しそうにアラビア語を習う少女たちは、コーラン学校の是非をめぐる大人たちの議論をまだ知らない。

(1990年8月、トルコ・イスタンブールのピヤレバジャ・モスク 林 徹)

# 研 究 活 動

## 共同研究プロジェクト

共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。これまで数多くのプロジェクトが組織され、多様な研究成果をあげてきました。

近年の国際化、学際化、情報処理技術の発達など、研究所をとりまく学界や社会の環境変化に対応して、本研究所は1991年度から大部門制へ移行しましたが、その改組の目的を実現するために共同研究プロジェクト組織も、以下のように再編成しました。

なお、( ) 内は各プロジェクトの研究代表者です。また、ここに名前があがっている共同研究員以外にも、必要に応じて研究協力者を依頼して研究活動を進めていきます。

## 言 語 文 化 基 礎 部 門

### 多民族国家における異化・同化形態の比較研究 (水島 司)

いかなる社会も文化も静的な存在ではなく、他者との接触を経て現在に至ったのだという認識に立つとき、文化・社会の動的な把握はもはや派生的な応用課題ではなく、一般理論を提供すべき基礎的分野として位置づけられる。本プロジェクトの目的は、そのような動態研究における一つの試みとして、多民族国家における異化と同化の形態を明らかにすることである。おのおの異なる専門領域に属する研究者を組織し、特定地域を集中的に研究することにより、異質な諸文化の接触によってもたらされる各文化自体の変容形態と、接触の結果、新たに生成されてくる文化形態に着目し、各文化のみならず、異化および同化の諸過程を明らかにする。それらの作業を通じて、異文化接触の一般理論を見出し、社会・文化動態研究への貢献を目指す。当面は典型的な多民族国家であるマレーシアを対象として、年数回の研究会を開催し、課題や方法についての議論を深めるとともに、現地調査にもとづいた研究成果を公刊する。

穴沢 真	小野沢純	加藤 剛	金子芳樹	辛島 昇
川崎有三	黒田景子	桑原季雄	交口善美	杉本 均
瀬川昌久	津上 誠	富沢寿勇	中澤政樹	西井涼子
野村 亨	弘末雅士	藤本彰三	山下晋司	

### 「未開」概念の再検討 (川田順造)

「未開」の概念は欧米諸国で民族学をはじめとして19世紀頃から広く使用されるようになり、現在まで文化人類学など文化・社会科学諸分野で用いられてきたが、この概念の成立過程、含意するものの文化的背景、研究上の概念としての有効性等については十分な検討がなされていなかった。この研究計画では、文化人類学、民

族学，民俗学，歴史学，哲学，国文学，人文地理学，音楽学，美術史，建築史，科学史，思想史等々関連諸分野の第一線研究者の参加を得て学際的な場でこの問題を検討する。それによって近代西洋で形成された概念を相対化するとともにそれをもととした日本人研究者の視点も対象化することを企図している。

今年度は，昨年度におこなった大文明と周辺文化をめぐる研究の総括をおこない，合わせて諸文化における秘密（結社）の問題を検討していく。成果は討論も含め，リポートから『未開』概念の再検討」Iとして平成元年に第1巻が刊行されたが，以下続刊の予定である。

阿部謹也	阿部年晴	網野善彦	綾部恒雄	安溪遊地
伊藤亜人	伊東俊太郎	上田 篤	内堀基光	應地利明
大貫良夫	樺山紘一	小西正捷	小松和彦	坂井信三
坂部 恵	桜井由躬雄	住谷一彦	関本照夫	竹沢尚一郎
田中哲也	田中雅一	谷 泰	田村克己	田村善次郎
塚田健一	塚本 学	柘植元一	徳丸吉彦	中村雄祐
二宮宏之	野村純一	野村雅一	船曳建夫	古橋信孝
堀内 勝	真島一郎	松園萬亀雄	松田素二	宮廻和男
宮田 登	安丸良夫	山下晋司	山本吉左右	渡辺公三
若桑みどり				

#### 現代世界の地域統合とエスニシティー（中村平次）

ここ数年来の世界的な激動は社会体制の相違を超えて従来の歴史学を含めた社会科学の諸分野での方法論や価値観の見直しを求めている。具体的には国民主権・民族自決・国民国家・連邦制度・地方分権といった諸問題が従来のまま存続することは不可能であるといった新事態が生まれている。本研究は地域統合とエスニシティーという二つの基本問題を対象にして上述の“渦中に置かれた”諸問題へのアプローチを試みるものである。その内容としてはASEAN, SAARCを主要関心の射程内に置き，同時にECヤソ連・東欧をも研究対象に組み入れたい。

- 1) まず，地域統合とエスニシティーに関して研究所に基本的な資料・文献を集積することを重視する。
- 2) また，各地域協力圏のなかの代表的と思われる事例を選択し，参加メンバーによる個別研究報告を予定する。
- 3) 当然のことながら，少数集団，または少数集団関係と把握されるエスニシティーの問題が地域統合との関連で検討される。
- 4) 「民族問題」が抑圧・被抑圧の契機を内包しているとすればエスニシティーの場合も同様であり，この点の歴史的な分析が重視される。
- 5) 本研究は3年間の継続を意図し，所内外の有志参加が期待され，一種の研究フォーラムであることが期待される。

石川一雄	伊野憲治	木畑洋一	木村英亮	桐山 昇
清水 透	清水 学	吉村慎太郎		

## 象徴と世界観の比較研究 (山口昌男)

アジア・アフリカ等の諸地域における説話、儀礼、身体活動などを、文化記号学の観点からとらえ、通文化的ならびに通分野的学問再構築のための方法論的接点を探る。

青木 保	稲垣正浩	内堀基光	落合一泰	蔵持不三也
小谷寛二	小松和彦	小山修三	寒川恒夫	清水昭俊
清水 諭	杉島敬志	関 一敏	中村敏雄	中村雄二郎
西村 康	野村雅一	舛本直文	松浪健四郎	宮坂敬造
山下晋司	山本徳郎	横井 清	リー・トンブソン	
渡辺公三				

## アジア・アフリカ諸言語の総合研究 (加賀谷良平)

このプロジェクトはアジア・アフリカ諸言語研究の最も基礎的な総合プロジェクトである。すなわち、フィールドワークによって得た、なまの膨大な言語資料を、コンピュータを始めとするさまざまな情報機器を用いて分類・分析したり、またそれらの資料を諸研究者による多角的分析・資料統合(同系統言語間での比較・異系統言語間での対照)を通じて、言語理論を構築することを目的とする。具体的にはこれらの研究の基礎となるフィールドワークによって得られたアジア・アフリカ諸言語の資料分析すなわちそれらの文法・音韻構造の解明並びにその情報化のための会合を開き、研究発表と討議をおこなう。また、その成果は、刊行を予定している、共同研究プロジェクト報告(通称年報)一冊と文法便覧2冊に発表する。

伊豆山敦子	岩田 礼	内田紀彦	上野善道	大島 稔
小田真弘	切替英雄	金 東俊	近藤達夫	坂本比奈子
崎山 理	柴田紀男	柴谷方良	清水克正	杉田 洋
杉藤美代子	副島昭夫	高階美行	田窪行則	田村すず子
檀辻正剛	辻 伸久	土田 滋	角田太作	富田健次
中井幸比古	中川 裕	中島 久	縄田鉄男	新田哲夫
橋本 勝	早田輝洋	原 誠	稗田 乃	福井 玲
福田権一	福原信義	益子幸江	溝上富夫	宮岡伯人
村崎恭子	森口恒一	藪 司郎	山田幸宏	湯川恭敏
吉川 守				



アフリカのどこでも赤ん坊のお守りは少女たちの仕事である。自分の弟や妹だけでなく、近所や一族の赤ん坊もおしつけられる。タンザニアウジジのスワヒリの少女ハワも日がな背中にお荷物をせおってあるきまわっている。(日野舜也)

## 言語文化情報部門

### 言語研修 (大江孝男)

本年度に予定する事業および研究活動は次のとおり。

1. 研修講座：実施言語——東京会場：ビルマ語，エストニア語  
大阪会場：中国語
2. 専門委員会2回（3年5月，4年3月），成果報告・検討のための専門委員・共同研究員合同会議1回（3年10月）。
3. 研修教材作成と研究連絡のための研究会：東京，大阪各2回（計4回）。
4. 自動化研修（CAIプログラム）開発班の研究活動：「自動化研修（CAIプログラム）開発とハイパーテキスト化研究」プロジェクトとその研究協力。

以上の課題をもって，前年度に引き続き本研究所の言語研修に関する諸問題を検討するとともに，日本語との対照研究を通じて対象言語の特徴を把握し，教材と方法などの改善に役立てる。検討課題は，研修のあり方，実施言語の選定と計画の検討，実施方法（カリキュラム，テキストの構成，指導・訓練の方法，効果の測定，評価の方法）などである。

大坪一夫	吉川武時	高田美佐子	奥平龍二	土橋泰子
原田正美	百瀬 宏	村田郁夫	庄司博史	志摩園子
佐久間淳一	杉村博文	古川 裕		

### 自動化研修（CAIプログラム）開発とハイパーテキスト化研究 (大江孝男)

本年度に予定する事業および研究活動は次のとおり。

1. 自動化研修（CAIプログラム）開発班の研究会：東京3回（3年6月，9月，12月）。
2. ハイパーテキスト化，およびエキスパート・システム編成に関する研究会（未定）。

上記において，検討すべき課題は次のとおり。

- ①自動化研修開発班は，第2期として申請する科学研究費補助金による研究計画（2年）を中核として，自動化研修の利用に関する研究（自動化可能な範囲，実施可能な事業，プログラムの開発，必要な施設，など）を実施する。
- ②ハイパーテキスト化，およびエキスパート・システムの現状と必要な機器，ソフト等の現況を調査し，実現すべき形態と活用する方法，組織等について検討する。特に，機器購入費，消耗品費，人件費等の費用をまかなうため，次年度以降，科学研究費補助金による研究班の編成を検討する。

岩居弘樹	大坪一夫	高田美佐子	中川 裕	長谷川教佐
益子幸江	町田和彦	吉川武時		

### 辞典編纂プロジェクト (梅田博之)

アジア・アフリカ諸言語の言語資料を蒐集，機械処理し，それに音韻論的，辞学的，形態論的，統辞論的分析を施し，これらの言語の辞典の編纂にそなえることを目的とする。

遠藤由里子	太田 斎	大塚秀明	大橋由美	落合守和
金子真也	北村 甫	慶谷壽信	佐々木猛	佐藤 進
讚井唯允	武内紹人	辻 伸久	豊島正之	富平美波
中村雅之	花登正宏	平田昌司	町田和彦	宮脇淳子

### ワールド・ミュージックの通文化的研究 (梶 茂樹)

現在、世界のさまざまな地域で、その地域に発したポップス(歌謡曲)が展開している。そして、それは今や国境を越え、世界化しようという勢いである。今まで、非欧米系の音楽を研究する学問分野として民族音楽学があったが、これは主として一定地域の伝統音楽を対象とするのみで、その地域の音楽をトータルに示してこなかったきらいがある。本研究では、現在アジア・アフリカ地域に展開するさまざまな歌謡曲を、伝統音楽とのつながりをふまえつつも、特にその都市性との関連でとらえ、その地域に住む人々と音楽との関係を社会学、人類学、言語学、音楽学などの専門家をまじえて学際的に考察する。

江口一久	遠藤保子	サイド・モハメッド	鈴木裕之	中村雄祐
真島一郎	宮本正興	山下晋司		

### アジア・アフリカ言語文化資料の情報処理に関する基礎的研究 (奈良 毅)

本プロジェクトは、アジア・アフリカ諸地域における言語、文学、歴史、地理、政治、経済等に関する文献情報をデータベース化し、さらに本研究所がおこなっている海外学術調査と連動し、それによって得られた音声・映像・画像情報を利用して、これら文献・音声・映像・画像情報を統合することによって立体的な情報処理をおこない、より高度なハイパーテキストを構築することを目的とする。

本年度は、①南アジア地域に関連した諸言語(ベンガル語、ヒンディー語、パンジャブ語、タミル語、カンナダ語、サンタル語、カスイ語、ルジャイ語、オリヤ語、カシミール語、マラーティー語、テルグ語、ムンダリー語、メイティ/マニプーラー語等)のデータベース化をおこない、その言語学的分析、および統合的な情報処理(ハイパーテキスト)の方法を研究するグループと、②西アジア地域に関する諸言語(アラビア語、ペルシア語、トルコ語、チャガタイ・トルコ語、オスマン・トルコ語、アゼリー・トルコ語、ウズベク語、ウイグル語、ヘブライ語、グルジア語、アルメニア語等)のデータベース化をおこない、その言語学的・歴史的な分析、および統合的な情報処理の方法を研究するグループとの2分科会を設けて実施する。両分科会は、常時情報交換をおこない、かつ共同研究会をもつことによって各分科会の研究成果を統合した広域的ハイパーテキストを構築することをめざす。

家本太郎	内田紀彦	岡田恵美子	小野 浩	カリヤン・ダスグプタ
児玉 望	齊藤寛海	坂田貞二	佐藤次高	サロージキ・チャウドリ
杉山正明	鈴木 董	関根謙司	竹田 新	長 弘毅
林 典門	藤井 毅	町田和彦	松木栄三	間野英二
溝上富夫	藪 司郎	湯川 武		



## 広域言語文化第一部門

### アジア人移民社会の研究——特にインド人（南アジア人）コミュニティーを中心に（内藤雅雄）

本研究は、中国人と並んで古くから、また広範な地域にわたって移民として出ていったインド人（パキスタン系、バングラデシュ系を含めて南アジア人と総称する）が、移民先でどのようなコミュニティーを形成したのか、それが全体社会のなかでどのように位置づけられてきたのかを、政治学、経済学、歴史学、人類学、言語学など学際的な観点から考察しようとするものである。

彼らは移民の時期や動機は異なるが、世界各地に広がっていった。そして時に先住の人々との間に齟齬や対立を生み出したり、また不可避にホスト社会の社会的、文化的影響にさらされながらも、言語、宗教、カーストなどさまざまな伝統的な価値や慣習の維持につとめ、独自のアイデンティティを創出してきた。本研究ではまず、インド人（南アジア人）の各地各国におけるこうした移民コミュニティー形成の歴史をつぶさに再構成していく作業が課せられよう。

今日、多くの国々でインド人（南アジア人）コミュニティーの存在は、すでにその社会における不可欠の構成要素をなし、彼らの存在がその政治、経済、さらに社会、文化等さまざまな分野で無視し得ないインパクトを及ぼしていることも事実であり、この問題は移民研究の重要なテーマであろう。先進諸国においても、移民ないしマイノリティー・コミュニティーの人権や地位、アイデンティティのあり方が深刻な政治的、社会的問題として顕著化しているが、これを考える上でも、上述したようなインド人（南アジア人）コミュニティー形成の歴史およびホスト社会あるいは他のマイノリティー・コミュニティーとの関わりを広い視点から捉える作業は、極めて重要な手がかりを提供してくれるものとなろう。

研究の対象となる地域としては次のようなところを考えている。

ケニア、タンザニア、ウガンダ、フィジー、モーリーシャス、トリニダード・トバゴ、ガイアナ、スリナム、UK、カナダ、USA、東南アジア諸国、香港、沖縄、神戸、横浜

宇佐美久美子	木曾順子	古賀正則	富永智津子	長谷安朗
浜口恒夫	松井透	三宅博之	山本由美子	脇村孝平

### 東アジアの社会変容と国際環境（中見立夫）

近年における18—20世紀東アジア史研究の特色は、従来にくらべて大幅に文書史料の利用が可能となったことである。これらの文書史料の状況を、体系的に把握して研究へ結びつけていくことがなよりの急務である。また関係諸国学界・研究者との交流も飛躍的に拡大するとともに、おたがいの研究の共通性と異質性も明らかになってきた。本プロジェクトでは、18世紀より20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題点を、文書史料によりどこまで明らかにできるか検討する。

毎年度トピックを決め、ゲストを含めた研究会を開くとともに、研究叢刊、資料叢刊も刊行する予定である。

赤嶺 守	石井 明	伊藤秀一	石橋崇雄	井上裕正
臼井勝美	江夏由樹	岡 洋樹	尾形洋一	笠原十九司
加藤直人	岸本美緒	楠木賢道	佐々木揚	佐藤公彦
中村 義	西村成雄	萩原 守	濱下武志	原山 煌
藤井昇三	毛里和子	森山茂徳	柳澤 明	

### 言語文化接触に関する研究 (中嶋幹起)

東アジアに共生する幾多の民族の言語は多様性に富み、その長い歴史と相まって、多くの言語資料が集積されている。さらに、近年は、中国やソ連などの開放政策により、学術成果も公にされつつある。本プロジェクトでは、満洲語、モンゴル語、エウエンキ語、漢語、ウイグル語、チベット語、白語などの言語研究者が現地調査での成果を報告し、それぞれの研究について、言語学のみならず、文化人類学、歴史学などの分野を含めた多角的かつ広域的視点から討論をおこないつつ、言語のダイナミクスを探る。刊行は『言語文化接触に関する研究』を続行する。

落合守和	栗林 均	黒田信一郎	高田時雄	辻 伸久
津曲敏郎	花登正宏	樋口康一	星実千代	細谷良夫
前川捷三	村上嘉英	森安孝夫	山川英彦	横山廣子
李 乃因				

### アジア遊牧民の歴史と言語 (岡田英弘)

アジアの全体史像を構築するにあたって問題となる諸要素の一つは、内陸地域に広く散在する遊牧民の史的役割である。しかしその解明は史料の制約と用語・概念の未発達のために遅れた段階にある。この研究プロジェクトでは、満洲、モンゴル、トルコ、チベット、ペルシア、アラビア等の地域の歴史と言語の専門家の協力のもとにできる限り一貫した叙述の可能性を探求することを目的とし、年2回の研究会を開催する。

河内良弘	窪田新一	栗林 均	後藤 明	小山皓一郎
佐口 透	志茂碩敏	濱田正美	樋口康一	松村 潤
間野英二	宮脇淳子	森川哲雄	山口瑞鳳	吉田順一

### 南東アジアにおける「正統」の波及・形成と変容 (石井 溥)

ユーラシア大陸南東部の多くの文化は、それぞれの基層文化の上にインドや中国の文明の影響を直接、間接に受けつつ形成されてきた。そのようななかで、各文化・社会が自らを「正統的」なものとして作り上げていく傾向は、かなり一般的に見られる現象と考えられる。このような「正統」観念はインド文明の及んだ地域では、人間・文化・社会のあるべき姿を指す「ダルマ」という言葉で表わされることが多い。

本プロジェクトでは、ヒマラヤ地域、スリランカ、東南アジアを主対象地域とし、大文明、特にインド文明との接触によって形成された諸文化のありかたを「ダルマ」の概念を念頭に置きつつ比較考察し、その類似性、多様性を究明し、さらに

相違についてはその存在の理由を考える。分析対象としては政治組織、都市構造、宗教、宗教図像、社会構造、日常生活などの側面を取り上げ、基層文化にも十分な注意を払う。また、方法としては、従来の手法に加え、都市構造、宗教図像の研究などにハイパーテキストを利用し、統合的分析を目指す。

なお、ここでいう「南東アジア」とは、アジアのなかで、カシミールより東および南に位置する諸地域を指すこととする。

井狩彌介	永ノ尾信悟	奥平龍二	鏡味治也	鹿野勝彦
小林正夫	島 岩	鈴木正崇	関根康正	高谷紀夫
田中雅一	外川昌彦	長野泰彦	西 義郎	平松礼子
藤井知昭	真実真弓	南真木人	山本勇次	結城史隆

### 東南アジア史像の変革 (池端雪浦)

本プロジェクトの目的は歴史学・考古学・歴史民族学・国際関係論の学際的研究によって、東南アジア史を総合し、新しい東南アジア史像を構成することにある。ここ十数年来、東南アジア史の研究は国の内外で飛躍的な展開をみせている。この背景には、1) 史(資)料の発掘・収集・利用面において、また現地調査の機会・規模・方法において、研究者をとりまく研究環境が大幅に改善されたこと、2) 関係諸科学に触発されて過去の経験的世界への関心が多様化するとともに、過去の経験的事実や事象を処理・解釈するための概念構成や参照枠組みが精緻化され洗練されてきたことなどがあげられよう。しかし、こうした研究状況に支えられて個別研究の面では長足の進展がみられた反面、それらを総合する仕事は著しく後れている。総合化は当面、二つのレベルで要請されている。一つは、過去の事実や事象を構成する内在的世界と外在的世界をどのように総合して把握するかという問題。二つは、個々の時代に多様な〈社会〉あるいは〈域圏〉の有機的連関として成立していた〈東南アジア世界〉が、時間軸にそって全体としてどのような変化の姿を織り成してきたのかという問題である。本プロジェクトではこれらの問題の考察と併せて、東南アジア史研究に関する史(資)料のデータベース作りをおこなう。

石井米雄	石沢良昭	伊東利勝	大橋厚子	大林太良
奥平龍二	川島 緑	齋藤照子	桜井由躬雄	白石昌也
鈴木恒之	高田洋子	土屋健治	量 博満	早瀬晋三
弘末雅士	深見純生	桃木至朗	山本達郎	



インドネシア、ヨグヤカルタにて。宮廷の周囲には職人が住んでいる。これは日傘職人の店。ただの日傘ではなく、王族や宮中の高官が行進するときに用いるものである。爵位・官位によって、使う色が異なる。(宮崎恒二)

## 広域言語文化第二部門

### アフリカにおける都市化の比較研究 (日野舜也)

本研究は、現代アフリカにおいて進行するもっとも大きな社会変化である都市化と地域形成の問題について国民社会の形成、都市社会の構造、都市村落関係の展開、地域共通文化、リングァ・フランカ（地域共通語）の機能などとの関連において、長期のフィールドワークをとまなう、長期継続的な比較研究をおこない、その資料にもとづいて動態的に解明しようとするものである。

今年度は、平成2年度に発刊した第一巻につづいて *African Urban Studies*, Vol. II の刊行をおこなうとともに、科学研究費による現地調査をおこなう。

赤阪 賢	上田 将	江口一久	大森元吉	小倉充夫
門村 浩	菊地滋夫	小馬 徹	坂本邦彦	嶋田義仁
戸田真紀子	富川盛道	富永智津子	中村孚美	端 信行
原口武彦	福井勝義	前山 隆	松田素二	宮治美江子
米山俊直	和崎春日	和崎洋一	渡部重行	和田正平

### イスラム圏における異文化接触のメカニズム (家島彦一)

イスラム世界の基本的な特質は、その地理的な広がりや長期にわたる歴史展開の過程で、複雑に、かつ重層的にさまざまな文化的・社会的要素を含有し、対立・緊張と共存・調和の諸関係のなかで変容してきた多重・多層の国際的な流動社会であると捉えることができる。

本プロジェクトは、そうしたイスラム世界の社会・文化にみられる接触のメカニズムを総合的に明らかにすることを目的としている。以上の目的にもとづいて、本プロジェクトは、過去4年間にわたって、「市(sūq/bāzār)の比較研究」を具体的なテーマとして研究を進めてきた。すなわちイスラム圏における都市内の常設市、年市と定期市の構造と社会経済的・文化的機能、中立の場としての機能、市のネットワークをつうじての他世界との接触、市の歴史的展開と現代における変容過程、イスラム圏以外の諸地域における市との比較研究、地理学・社会学・農業経済や都市問題など、広域的・学際的視点にもとづく研究をおこなっている。なお本プロジェクトと連動して、平成元年より3年間の計画で海外学術調査を実施している。

本年度のプロジェクト研究会では、これまでの現地調査によって得られたデータを討議・分析し、基礎的資料については *Studia Culturae Islamicae* (イスラム文化研究シリーズ) および研究報告『イスラム圏における異文化接触のメカニズム—市の比較研究—』(第3巻)として刊行する予定である。本プロジェクトは、その研究対象においてアジア・アフリカの広域的な地域にまたがる諸問題を含んでおり、研究部門「広域言語文化第二」に関連する共通の課題として研究を進める。

赤阪 賢	麻田 豊	石原 潤	太田敬子	加藤 博
川瀬豊子	川床睦夫	後藤 明	斉藤寛海	斉藤美津子
坂本 勉	佐藤次高	真田 安	薮 勇造	関本照夫
柘植洋一	奴田原睦明	信岡奈生	原 隆一	深澤克己
堀井 優	松木栄三	三浦 徹	三木 亘	宮治美江子
森川孝典	山形孝夫			

# 国際学術交流

## 外国人研究者の招へい

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家を外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招へい計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。過去5年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。

Shanmugam Pillai Subbiah	インド	農村地理学, 社会地理学
Ahmet Mete Tuncoku	トルコ	国際関係論
James Francis Downs	アメリカ	文化人類学
李 榮	中華人民共和国	中国語音韻論, 方言学
賀 巍	中華人民共和国	中国語方言学
Kyaw Win	ビルマ	ビルマ史
Virgilio G. Enriquez	フィリピン	社会心理学, 言語心理学
Saroj K. Chaudhuri	インド	日本語, 日本文化
John H. Fincher	アメリカ	中国現代史
Urmila Phadnis	インド	国際関係論
特 布 信	中華人民共和国	モンゴル史
侯 精一	中華人民共和国	中国語方言学
Nasrin F. Hakami	イラン	社会学
照那斯图	中華人民共和国	モンゴル語学
任 洪彬	大韓民国	韓国語学
胡 坦	中華人民共和国	シナ・チベット語学
王 鍾翰	中華人民共和国	清朝史
Frank M. Heidemann	西ドイツ	民族学, 社会学
張 興権	中華人民共和国	言語学
成 百仁	大韓民国	満洲語学
Mohammad-Reza Nasiri	イラン	イラン近現代史
Nai Pan Hla	ミャンマー	モン語学
Jerry Norman	アメリカ	中国語学
Patrizia Violi	イタリア	記号学
Toomas Help	ソヴィエト連邦	エストニア語学
David P. B. Massamba	タンザニア	スワヒリ語学
Lawrence Reid	アメリカ	オセアニア語学・歴史学
Hans-Peter Vietze	ドイツ	モンゴル語学
Wufera Yaek'olingo	ザイール	口承文芸学
龔 煌城	台湾	西夏語学

## 外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実をはかろうとしています。

これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下の通りです。

外国機関名	締結年
<b>カメルーン国立人文科学研究所</b>	1978年
1969年以來の文部省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」(研究代表者・富川盛道教授)におけるカメルーンとの共同研究にさいして、双方において、研究協力協定の必要性が認識され、1978年9月、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長、Samuel Ndoumbe-Manga氏をまねき、本研究所において協定が締結された。	
協定締結後の共同研究、所員の現地における共同研究(1980—81, 82, 84, 86):カメルーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91):本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行、単行本7冊( <i>African Languages and Ethnography</i> シリーズ),論文1点(Sudan Sahel Studies)	
<b>インド諸語中央研究所(CIIL)</b>	1987年
CIIL 所長本研究所訪問(1983), 副所長来訪(1985), 所員来所共同研究(1984—85):本研究所所員 CIIL 訪問(1982, 87, 88, 89, 91):共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施、共同研究年次報告書発行(1990, 91)	
<b>インド統計研究所(ISI)</b>	1988年
ISI 特別客員研究員本研究所来所共同研究(1985—86), 経済研究部長来訪(1988):本研究所所員 ISI 訪問(1987, 88, 89, 90, 91):共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中(1987—):電算資料シリーズ3冊発行(1987, 88, 90)	
<b>チベット言語文化研究所(フランス)</b>	1988年
敦煌の古代チベット語文献のデータベース化をおこなっているが、その一部の KWIC 索引は、 <i>Choix de Documents Tibetains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique</i> として、フランス国立図書館から1990年に出版された。	
<b>マリ人文科学研究所</b>	1990年
文部省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を ' <i>Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires</i> Vol. 1. (1988), Vol. 2. (1990) として刊行した。	

## 海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査をおこなうことを、重要な研究課題の一つにしています。過去5年間に、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）で、本研究所員が組織した海外学術調査は以下のとおりです。

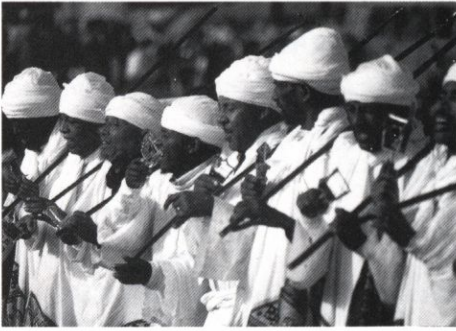
- 1) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究  
1983年, 1984年 (三木 亘), 1986年 (上岡弘二)
- 2) バントゥ諸語の調査・分析と比較研究  
1984年, 1985年, 1987年 (湯川恭敏)
- 3) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究  
1986年, 1988年, 1990年 (川田順造)
- 4) アフリカにおける都市化の総合比較調査  
1986年, 1987年 (日野舜也)
- 5) 南アジア諸言語の調査研究とそのデータベースの作成  
1987年, 1988年, 1989年 (奈良 毅)
- 6) アフリカにおける都市化の比較調査—とくに、地域形成・国民社会形成との係わりにおいて—  
1989年, 1990年, 1991年 (日野舜也)
- 7) イスラム圏における市の比較研究—異文化接触のメカニズム—  
1989年, 1990年 (上岡弘二), 1991年 (永田雄三)
- 8) バントゥ諸語と若干の隣接諸語の記述・比較研究  
1989年 (湯川恭敏), 1990年 (加賀谷良平)
- 9) 中国周辺部における言語接触と社会文化変容—漢族文化と非漢族文化との相互関係—  
1990年, 1991年 (中嶋幹起)
- 10) 電算機補助による南アジア諸言語の研究  
1991年 (奈良 毅)
- 11) 多民族国家マレーシアにおける「共同体」の総合的研究  
1991年 (宮崎恒二)

なお、このほか各種財団の助成金による海外学術調査も組織されています。「海上ルートを通じての東西の文化的・経済的交流—インド洋周辺の港市遺跡の調査—」(研究代表者・家島彦一, 1984-85), 「フィリピン・フォークカトリシズムの歴史人類学的研究」(研究代表者・池端雪浦, 1984-87)などがその一部です。



土中に埋込んだ、大きなパン焼きがま(ペルシア語 tanūr)で、何家族かの、何日分かのパンを共同で焼く。男がこの仕事をするのではない。焼きたてのパンは、塩分が少々ききすぎだが、なかなか美味である。(イラン中央州コマンド村にて, 1990, 秋 上岡弘二)

## 助手等の現地投入



エチオピア正教会のマスカル祭（表紙写真説明参照）における聖歌隊。隊員は二列になって向き合い、太鼓のリズムにあわせて、聖歌を歌いながらゆっくりとした所作で踊る。歌のメロディや節回しは、日本の御詠歌によく似ている。1990年9月27日、アディス・アベバにて撮影。

（栗本英世）

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の修得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計26名が派遣されました。

- |             |                                   |
|-------------|-----------------------------------|
| 1967年—1969年 | 石垣幸雄（エチオピア）、守野庸雄（タンザニア）           |
| 1969年—1971年 | 松下周二（ナイジェリア）、家島彦一（アラブ連合）          |
| 1971年—1973年 | 内藤雅雄（インド）、中野暁雄（モロッコ）              |
| 1973年—1975年 | 福井勝義（ソマリア）、中嶋幹起（香港）               |
| 1975年—1977年 | 加賀谷良平（ボツワナ）、湯川恭敏（タンザニア、ザイール）      |
| 1977年—1979年 | 石井 溥（ネパール）、藪 司郎（ビルマ）              |
| 1979年—1981年 | 羽田亨一（イラン、トルコ）、清水宏祐（アラブ連合、イラン、トルコ） |
| 1981年—1983年 | 山本勇次（ネパール）、新谷忠彦（ニューカレドニア）         |
| 1983年—1985年 | 辻 伸久（中国、香港）、水島 司（インド）             |
| 1985年—1987年 | 中見立夫（中国、モンゴル）、梶 茂樹（ザイール、ケニア、ザンビア） |
| 1987年—1989年 | 松村一登（フィンランド、ソ連）、宮崎恒二（オランダ、インドネシア） |
| 1989年—1991年 | 林 徹（中国、トルコ）、栗本英世（エチオピア、ケニア）       |
| 1991年—1993年 | 栗原浩英（ベトナム、ソ連）、峰岸真琴（インド）           |



トルコの飴売りおじさん。色とりどりの飴を1本の棒に巻きつけてくれる。（1990年8月、トルコ・イスタンブールのスレイマニエ地区 林 徹）



## 共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクトとは別に、本研究所において一定期間（2週間以上2ヶ月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。

応募資格：大学・研究機関の研究者，大学院生，またはこれに相当する者

募集期間：5月15日～6月29日

現在までに86名を委嘱し，うち，昨年度は次の方々に委嘱しています。

氏名	所属	研究テーマ	担当教官
都築正喜	愛知学院大学 教養部助教授	日本語と韓国語の子音比較研究	梅田博之
金美花	東京大学大学院	異文化の中の子どもたち ——中国における少数民族の教育——	梅田博之
曹喜澈	中央大学大学院	辞典編纂プロジェクト ——日韓辞書のあり方——	梅田博之 大江孝男
尹宣熙	神戸大学大学院	韓国語の不規則活用の用言について	梅田博之 大江孝男
宮本律子	聖霊女子短期大学 専任講師	ナイジェリアにおける言語研究	松下周二
茨木透	都立大学大学院	語学研修（ハウサ語）	松下周二
貴志俊彦	広島大学大学院	南京国民政府の内モンゴル政策をめぐって	中見立夫
生駒雅則	神戸大学大学院	1920年代のモンゴルとコミンテルン	中見立夫
中原ゆかり	東京学芸大学大学院	儀礼と音楽のコミュニケーション	川田順造
榊和良	北海道大学大学院	異文化相互理解における言語の研究	奈良毅
阿部強	中央大学大学院	フィリピン・ナショナリストにおける「民族意識」の認識	池端雪浦

## 研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力がある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。

研究生は入所料と研究料を納付し，指定の教官の指導を受けます。

1991年度

氏名	研究テーマ	指導教官
児玉武史	トルコ革命期外交の研究	永田雄三
太田智子	西アジアの遊牧民の研究 ——遊牧民の世界観を探求する——	永田雄三
李紅纓	チベットの活仏現象に対する文化人類学的理解	中沢新一
鴨澤麻衣子	現代イギリスにおけるシク移住民	中村平次

# 言語文化情報の統合化

本研究所は現代の電子工学理論を高度に活用し、アジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ化し、それぞれの言語の音韻論的、統辞論的、語彙論的分析はもちろんのこと、歴史的、民族的、社会学的研究など、多目的な用途に供せられるデータベースの作成をはかってきました。本研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータについて一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論的情報を分析・形式化し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリントアウトするために、デーヴァナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングルなどの文字フォントを製作し実際に使用しています。1988年にはモンゴルの文字フォントが追加されました。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語、モンゴル語などのデータが蓄積されつつあります。

さらに、近年の画像処理技術のめざましい発展をもとに、文字情報のみならず、音声・画像・映像情報をコンピュータに取りこみ、文字情報と結びつけて、歴史文献や祭祀、舞踊、音楽などの民族学的データを蓄積し、これを統合化して高度なデータベースを構築し、辞典・事典の編纂に応用するための研究を進めています。

## 言語データのプリントアウト例 (上：ヒンディー語, 下：チベット語)

<p>GDN01407 GDN01213 GDN01127 GDN01707 GDN01805 GDN00932 GDN01630 GDN01351 GDN01911 GDN01346 GDN01919 GDN01827 GDN01125 GDN01022</p>	<p>न था, धोड़ा-सा मनोरंजन भी था। बुद्धों मंगिता है। 'बड़ा भारी कलेजा है तुम लोगों सानों के हाथ गायें बेच भी देता था। होरी लवानेवासा था। देख, अबकी तुझे राजा जनक के कपूती है। शराब पीने लगे, तो वह प्रजा स्था ने उसके अन्न-सम्मान को उदासीनता भी पायी थी और धनुष-यज्ञ को नाटक उसके मन को भील बनाथे रहती थीं। ईश्वर दिया है कि हममें शील, विनय और सेवा को इसकी ज्यादा शर्म न थी। इस व्यवहार मारे सिर पर मँडराता रहेगा, हम मानवता दुर्गापाठ हो रहा है और ज्योतिषाचार्य कुण्डली हूए पुरवे का खाला था और दूध-मक्खन रही थी। उसके अन्तःकरण से जैसे आशीर्वादों</p>	<p>का बुद्धमस हास्यास्पद वस्तु है और ऐसे बुद्धों से अगर का भाई, लेकिन फिर लाये भी तो वह माल कि यह का मन उन गायों को देख कर ललचा गया। अगर भी का माली बनना पड़ेगा। समझ गया न, जिस वक्त श्रीजा का रक्त होगा। अगर ऐयाशी नहीं करता, तो अरथिक का रूप दे दिया था। जिस गृहस्थी में पेट की रोटीयाँ का रूप देकर उसे शिष्ट मनोरंजन का साधन बना दि का रौद्र सदैव उसके सामने रहता था। पर यह छल का लोप हो गया है। मैं तो कभी-कभी सोचता हूँ कि का वह आदो था। कृष्क के जीवन का तो यह प्रसाद का वह पद न पा सकेंगे जिस पर पहुँचना ही जीवन का विचार कर रहे हैं और तन्त्र के आचार्य अपने अ का व्यवसाय करता था। अच्छा दाम मिल जाने पर कम का व्यूह-सा निकल कर होरी को अपने अन्दर छिपा</p>
--	--	---

P0016,26b3 བཅས་ནས་ཡན་དུ་ཆབ་སྲིད་ཀྱི་མཐུན་མྱི་འགྲོང་ཞིང་བརྟན་པ་དང།  
ནས་ཞུས་མང་པོ་ཀུན་གྱིས་ཡིད་ཆེས་ཤིང་བདེན་བའི་རྟགས་རྩི་རིངས་ལ་བྲིས་ནས་དཀོན་མཆོག་གསལ་གྱི་རྟོན་བཅུགས་ལ་འདི་

P0016,26b4 མདོ་སྲིད་ལང་ལས་ཀྱང་། ལ་ལ་ཞིག་གིས་འཇམ་བུ་སྐྱིད་དུ་གཅུག་ལག་ཁང་བཅོམས་ན།  
བསོད་ནམས་ཆེན་པོའི་གཟུགས་བརྟན་འོག་སྲིད་གནས་དུ་ལྷའི་གཞལ་སྲིད་ཁང་འབྲུང་ཞེས་སངས་

# 言語研修



ペルシア語



インドネシア語

アジア・アフリカの言語の修得のための教育訓練は、わが国では開発がおこなわれていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からの7年間ほぼ毎年夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ1言語か2言語ずつ実施しました。1974年からは本格的におこなうことになり、本研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者の協力をえて、東京（2言語）と関西（1言語）で初級コースを延べ49言語について実施してきました。最近の実施言語は下記のとおりです。

## 研修言語名（修了者数）

年度	東京会場	関西会場
1980	ネパール語(14)、モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1981	ヒンディー語(8)、バシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12)、ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12)、フィンランド語(21)	パンジャブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12)、ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14)、カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5)、タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10)、タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシア語(10)、トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20)、ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11)、インドネシア語(11)	ペルシア語(14)

研修生（各言語約10名）は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料、受講料を納付することになります。また、課程を修了した人には審査のうえ修了書が授与されます。

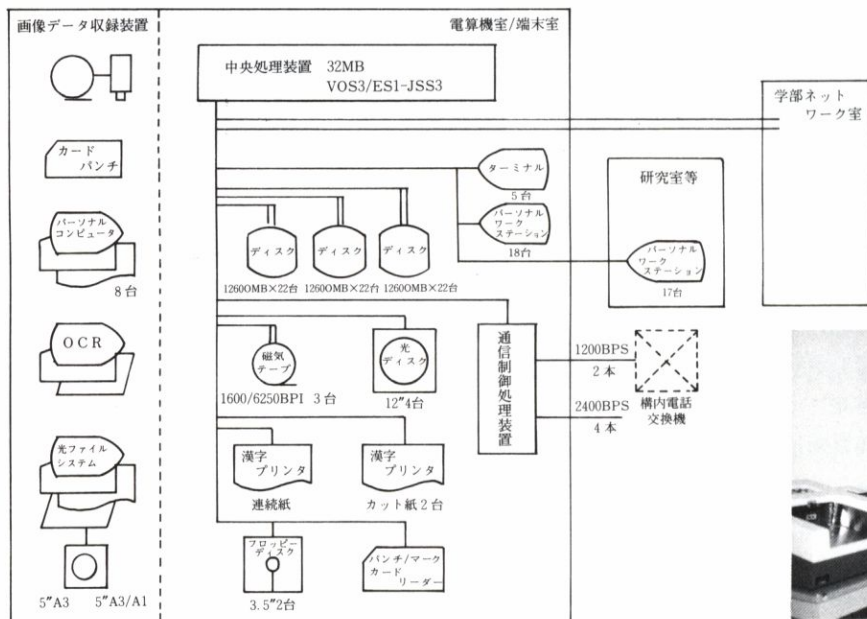
各コースの研修時間は1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間で実施しています。

上記の研修事業と関連して、より効果的で充実した研修方法を開発するための研究の一環として、科学研究費補助金による支援を受けつつ、言語研修において自動学習機器に合わせて機械化する部分をプログラム（CAI）化するための研究を実施しています。この研究によって開発した「CAIプログラム」は、研修コースのなかで補助教材として活用することが期待されるばかりでなく、必要に応じて希望する言語の学習をすすんで個人的に受講できるよう設営し、増大し多様化する社会的要請に応えるようにすることを目指すものです。

# 施設

## 電 算 機 室

システム構成図



本研究所では、1978年1月から HITAC M-150システムを導入し、HITAC M-240Dを経て現在 HITAC M-640/20システムが稼動しています。主記憶32MB、ディスク総容量15GB、12インチ光ディスク4ドライブ、磁気テープ3デッキ、3.5"フロッピーディスク2ドライブがあります。入力にはパンチ/マークカードリーダーがあります。出力のためには連続紙漢字プリンタの他にカット紙漢字プリンタが2台あります。これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されていて、国内外の研究者に利用されています。ワークステーションは、電算機室には18台ですが、研究室等にも設置されています。2,400BPSの通信回線には4台のパーソナルコンピュータが接続されています。また、1,200BPSの構内電話回線が2本あります。

ソフトウェアとしては、単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままを入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

オフラインの装置には、パーソナルコンピュータの他に、画像データ収録システムがあり、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に利用されています。また、1987年度から導入した光ディスクファイルシステムが2台あり、印刷された大量の資料を登録して、随時必要なページを参照できるようになっています。さらに、1988年度にOCRを導入し、ローマ字系テキストについては、短期間に大量のデータ入力をおこなうことができます。

## 図 書 室

日本における唯一の人文科学系全国共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を1964年の創設以来収集してきました。

対象地域の広域化、研究テーマの複合化、方法論の多様化など、これらの地域に関する研究の諸条件は近年大いに変化していますが、こうした状況に留意し、かつ内外の諸研究機関から参加する共同研究員や研究生および一般の研究者の需要にも応えるため、幅広い文献・資料の収集に努めています。海外研究機関（56ヵ国220機関）との図書交換を通じて研究書・論文集等も収集し、1991年3月末現在、蔵書総数は約68,300冊です。

蔵書のなかには、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力をいれ、機会あるごとにバックナンバーを購入する努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロ化されているほか、19世紀創刊のベンガル語文芸雑誌5種類のバックナンバーがそろっているなど、他の研究機関に見られない資料が所蔵されています。

また本研究所の特色あるコレクションとして、次のような文庫があります。

① **山本文庫**（昭和42年受入）

著名な満洲語学者、故山本謙吾氏（1920～65）の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和・洋書計598冊）を含む。

② **浅井文庫**（昭和45年受入）

著名なオーストラリア言語学者、故浅井恵倫氏（1895～1969）の蔵書。アジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類（和・洋書計191冊、文書18葉）をはじめ、高砂族関係の貴重な言語資料（図書・ノート・写真類・未完未発表の高砂族伝説集総索引カード等）を含む。

③ **小林文庫**（昭和51年受入）

著名なモンゴル史研究者である故小林高四郎氏（1905～87）の個人蔵書で、モンゴル民族の生活と習俗に関する文献（和・洋書計1,671冊）を含む。

④ **前嶋文庫**（昭和61年受入）

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である故前嶋信次氏（1903～83）の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受け入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記など広範な分野にわたる貴重なコレクションである。

このほか本研究所国語教育資料調査専門委員会が収集したアジア・アフリカ諸国の教科書約300冊も所蔵されています。また、外国人研究者のための日本研究資料（約1,220冊）の収集も積極的におこなわれており、海外および在日の外国人研究者の便宜に供する態勢も整えられつつあります。

さらに本研究所は、平成3年度に実現した大部門化移行にともない、資料収集の上でも新たな努力をおこなうことを考えています。その一つとして、広範な基礎文献・資料の購入という従来の基本的姿勢は維持しつつ、新研究体制下で考えられるいくつかの共同研究テーマにそってまとまりのある図書資料を収集する計画です。それらのテーマは、「広域人口移動と文化変容」「広域民族誌の比較研究」「国民統合と文化摩擦」「宗教と社会に関する比較研究」などです。

## 音 声 学 実 験 室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが……」

「フラニ語ってどんなことばですか？実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあっています。

音の性質・特徴やその調音状態を観察し記録するために、次のような分析機器が用意されています。サウンド・スペクトログラフは、音波を周波数分析して、その各時点ごとの音波の構成要素をとりだして特殊用紙上に濃淡模様で表示してくれます。周波数分析には用途に応じてワイドバンドとナローバンドがあります。ワイドバンドでの濃淡模様は各音の長さと共にそれぞれのさまざまな音色を示してくれ、ナローバンドでは各音の長さと共に音の高低変化を示してくれます。このような分析を通して未知の表現し難い音声を選んだ規準のもとで表現可能にしたり、またその調音状態を推測する手助けを与えてくれます。ピッチ・エクストラクターは、音の経過時間にしたがって各時点での基本周波数や音の強弱の度合を分析し、ブラウン管面上に表示してくれます。またその管面の表示を特殊紙上にコピーすることもできます。管面表示の最大時間長は10秒ですので、単語の分析のみならず小文のイントネーションの分析もできます。さらに長時間にわたる連続音声の記録のためにフォトコーダーがピッチ・エクストラクターとともに用いられています。フォトコーダーは、音声データの極めて詳細な観察のため、音声波を直接表示・記録することにも用いられています。エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を直接に観察し記録するための機器のひとつです。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、電極と舌との各時点ごとに変化する接触状態を、機械の前面パネルに口蓋状に配列した32個の小ランプの点滅により表示してくれます。また、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

さらに、アジア・アフリカ地域のマルチメディア・データベースの作成も予定されています。これはアジア・アフリカ地域の言語文化情報を、映像情報・音声情報・文字情報を統合して提供するデータベースです。例えば、「スワヒリ語での挨拶は？」と尋ねると、音声と文字による挨拶語の説明はもちろん、挨拶時の情感・表情・仕草などの感覚的情報も、映像で同時に提供されます。

このほかに、オープンリールテープ・カセットテープを高速にコピーするテープ・デュプリケーターが、言語研修用テープの作製やフィールド調査などで収集されたテープのコピーのために用意されています。また良好な条件でオリジナルテープを録音するために、防音室や各種のテープレコーダーやマイクロフォンが用意されています。

付属施設の“音声・言語研修資料室”には、フィールド調査で集められた世界のめずらしい言語や貴重な民話・民族音楽などのテープをはじめ、言語研修のテキストやテープ、各種の語学レコード・テープが整理保管され、研究者の利用の便をはかっています。

# 出版物一覽

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。なお、\*印のものは在庫がありません。

**アジア・アフリカ言語文化研究** Journal of Asian and African Studies, Nos. \*1(1968), \*2(1969), \*3(1970), \*4(1971), \*5(1972), \*6(1973), \*7(1974), \*8(1974), \*9(1974), \*10(1975), \*11(1976), \*12(1976), \*13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), \*20(1980), \*21(1981), \*22(1981), \*23(1982), 24(1982), \*25(1983), \*26(1983), \*27(1984), 28(1984), 29(1985), \*30(1985), 31(1986), 32(1986), 33(1987), 34(1987), 35(1988), 36(1988), 37(1989), 38(1989), 39(1990), 40(1990), 41(1991).

**アジア・アフリカ言語文化研究所 通信**, Nos.1~71(1966~91).

## アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- \*2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- \*5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
- \*6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasulid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. McFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. McFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*. Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*. Vol.2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. McFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab: 1920-1947*, 1981.
17. El-Araby, S. A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners—Methods and Media—*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux (Burkina-Faso)*, 1985.
- \*19. MIZUSHIMA, T., *Nattar and the Socio-Economic Change in South India in the 18th-19th Centuries*, 1986.
20. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 上冊, 1987.
21. TUNCOKU, A. M., *Jaþonya'nin çin Halk Cumhuriyeti'ne Karşı Politikası (1952-1978)*, 1987.
22. BALLARD, W. L., *The History and Development of Tonal Systems and Tone Alternations in South China*, 1988.
- \*23. ENRIQUEZ, V. U., *Indigenous Psychology and National Consciousness*, 1989.
24. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 下冊, 1990.
25. HARA, T., *Paribar and Kinship in a Moslem Rural Village in East Pakistan*.

## アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969.
- \*2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
- \*3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.
8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977.
9. 奈良 毅, *Avahaþtha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages*, 1979.
10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979.
11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980.
12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981.
13. 藪 司郎, アツィ語基礎語彙集, 1982.
14. 中嶋幹起, 浙南吳語基礎語彙集, 1983.
15. 湯川恭敏, サンバー語語彙集, 1984.
16. 梶 茂樹, *Lexique Tembo I*, 1986.
17. 辻 伸久, 湖南省南部中国語方言語彙集, 1987.
18. 橋本萬太郎, 納西語料, 1988.
19. 中嶋幹起, 山東方言基礎語彙集, 1989.
20. 新谷忠彦, 揚 昭, 海南島門語, 1990.

21. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典 A~C, 1990.  
 22. 松下周二, ハウサ語ソコト方言, 1991.  
 23. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典 D~J, 1991.

### 言語研修テキスト

- \*1. チベット語, 北村 甫ほか編, 全5冊(1974).  
 \*2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).  
 \*3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).  
 \*4. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1975).  
 \*5. ビルマ語, 大野 徹ほか編, 全5冊(1976).  
 \*6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).  
 \*7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).  
 \*8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊(1977).  
 \*9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).  
 \*10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).  
 \*11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).  
 \*12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).  
 \*13. ペルシア語, 勝藤 猛ほか編, 全3冊(1978).  
 14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).  
 \*15. ビルマ語, 藪 司郎編, 全3冊(1979).  
 \*16. ネパール語, 石井 溥ほか編, 全3冊(1980).  
 \*17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).  
 \*18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).  
 \*19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981).  
 \*20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).  
 \*21. パシュトー語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981).  
 \*22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビ編, 全2冊(1982).  
 \*23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).  
 \*24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全3冊(1983).  
 \*25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全3冊(1983).  
 26. パンジャーブ語, 溝上富夫編, 全3冊(1983).  
 \*27. ピリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編, 全2冊(1984).  
 28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全2冊(1984).  
 29. トルコ語, 勝田 茂編, 全3冊(1984).  
 \*30. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1985).  
 31. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全4冊(1985).  
 32. スワヒリ語, 宮本正興ほか編, 全5冊(1985).  
 33. 西南官話, 橋本萬太郎, 馬真ほか編, 全2冊(1986).  
 34. タミル語, 山下博司ほか編, 全2冊(1986).  
 35. ベンガル語, 溝上富夫ほか編, 全3冊(1986).  
 36. 中原官話, 中嶋幹起, 賀巍ほか編, 1冊(1987).  
 37. タイ語, 森 幹男ほか編, 全4冊(1987).  
 38. シンハラ語, 中村尚司ほか編, 全3冊(1987).  
 39. インドネシア語, 森村 蕃ほか編, 全3冊(1988).  
 40. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全4冊(1988).  
 \*41. トルコ語, 林 徹ほか編, 全4冊(1988).  
 42. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1989).  
 43. ベトナム語, 栗原浩英ほか編, 全2冊(1989).  
 44. アラビア語(エジプト方言), 藤井章吾ほか編, 全2冊(1989).  
 45. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1990).  
 46. インドネシア語, 宮崎恒二ほか編, 全3冊(1990).  
 47. ペルシア語, 岡崎正孝, ハーシュム・ラジャブザーデ編, 全4冊(1990).  
 資料1. スワヒリ語〈三日坊主コース〉テキスト, 守野庸雄編, 1冊(1985).

### 特定研究「言語」出版物

#### 「文字と言語」研究資料

- \*1. HASHIMOTO, M. J., *hP'ags-pa Chinese*, 1978.  
 2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化(資料集), 1978.  
 \*3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字(資料集), 1978.  
 4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(I), 1979.  
 5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.  
 6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.  
 7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(II), 1980.

#### 「AA 諸言語と日本語の学習」資料

- \*77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語1. 1978.  
 \*77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語1. 1978.  
 \*77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語1. 1978.  
 \*78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語2. 1979.  
 \*78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語2. 1979.  
 \*78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディ語1. 1979.  
 \*78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語1. 1979.  
 \*78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語1. 1979.



- 78—8. 梅田博之ほか：助詞対照用例集 1：「の」日本語——AA 諸言語，1979。  
 \*79—1ab. 梅田博之ほか：日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案)，1980。  
 \*79—3. 坂本 恭章：基本動詞対照用例集 日本語——タイ語 2. 1980。  
 \*79—5. 奈良 毅：基本動詞対照用例集 日本語——ヒンディー語 2. 1979。  
 79—6. 内記 良一：基本動詞対照用例集 日本語——アラビア語 2. 1980。  
 \*79—7. 守野 庸雄：基本動詞対照用例集 日本語——スワヒリ語 2. 1980。  
 79—8. 梅田博之ほか：AA 諸言語教育基本語彙表，1980。

## 共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告，1966。  
 アジア・アフリカ諸国国語教育資料目録，1967。
2. アジア・アフリカ言語調査票，上(1966)，下(1967)。
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告，Nos.\*1(1968)，\*2(1969)，\*3(1970)，4(1971)，5(1972)，\*6(1973)，7(1982)，8・9(1986)。
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告，Nos.1(1970)，2(1971)，3(1972)。
- \*5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告，Nos.\*1(1972)，\*2(1972)，\*3(1973)。
6. アジア・アフリカ文法研究，Nos.\*1(1972)，2(1973)，3(1974)，4(1975)，5(1976)，6(1977)，7(1978)，8(1979)，9(1980)，10(1981)，11(1982)，12(1983)，13(1984)，14(1985)，15(1986)，16(1987)，17(1988)，18(1989)，19(1990)。
7. *Asian and African Grammatical Manual*(アジア・アフリカ文法便覧)，1972～：
 

No. *11. Korean(梅田博之)，1973。 11z. Sakhalin Ainu(村崎恭子)，1978。 *12b. Fukienese(中嶋幹起)，1976。 *12z. Tibetan(北村 甫)，1977。 13. Indo-Aryan(石垣幸雄)，1980。 13a. Hindi(溝上富夫)，1980。 *13b. Marathi(内藤雅雄)，1976。 13c. Bengali(奈良 毅)，1979。 13d. Khaling(鳥羽季義)，1979。 13e. Panjabi(溝上富夫)，1981。 13x. Tamil(徳永宗雄)，1981。 13y. Malayalam(伊藤正二)，1978。 *14a. Cambodian(坂本恭章)，1974。 *14b. Burmese(藪 司郎)，1974。 14c. Thai(森 幹男)，1975。 *15b. Philippine(山田幸宏，土田滋)，1975。 *16b. Samoan(小田真弘)，1977。	*17. Persian(上岡弘二)，1976。 17b. Baluchi(縄田鉄男)，1981。 17m. Mazandarani(縄田鉄男)，1984。 17p. Parachi(縄田鉄男)，1983。 17s. Shughni(縄田鉄男)，1980。 *20. African(石垣幸雄)，1975。 *21. Swahili(守野庸雄)，1976。 *22a. Cushitic(石垣幸雄)，1972。 22b. Ethiopic(石垣幸雄)，1978。 *23. Hausa(松下周二)，1974。 *26. Fulfulde(江口一久)，1974。 33. Romance & Greek(石垣幸雄)，1973。 33y. Basque(石垣幸雄)，1979。 33z. Maltese(石垣幸雄)，1977。 34a. Albanian(石垣幸雄)，1979。 *36. Uralic etc.(石垣幸雄)，1976。 40. USSR Major(石垣幸雄)，1980。
---	---
8. アフリカ部族社会の比較研究，1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971)，\*2. アフリカ社会の地域性(1973)。
- \*9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告，1(1974)。
10. アジア・アフリカ語の計数研究，\*1(1975)，\*2(1975)，\*3(1976)，\*4(鄒 嘉彦，老乞大諺解単字索引，1976)，\*5(坂本恭章，カンボジア語小辞典，1976)，\*6(1976)，\*7(1977)，\*8(1978)，\*9(1978)，\*10(1979)，\*11(1979)，\*12(YUE, Anne O., *The Teng-xian Dialect of Chinese*, 1979)，\*13(1980)，\*14(藍清漢，中国語宜蘭方言語彙集，1980)，15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980)，16(1981)，\*17(傅懋勳，納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈上册〉，1981)，\*18(徐琳・木玉璋，傣族《創世紀》研究，1981)，19(1982)，20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982)，\*21(1983)，\*22(1984)，23(傅懋勳，納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈下册〉，1984)，24(1985)，25(ポール K.ベネディクト，突破口：東南アジアの言語から日本語へ—日の神の民の起源，1985)，26(1986)，\*27(徐琳，白族《黄氏女対経》研究，1986)，28(1987)，\*29(徐琳，白族《黄氏女対経》研究〈続〉，1988)，30(1988)。
- \*11. *Oceanic Studies*, No.1(1976)。
- \*12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集\*1(1976)，\*2(1977)。
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究：南アジア農村社会の研究，1(1977)，2(1978)，3(1979)，4(1979)，5(1980)，6(1985)，7(1987)，8(1987)。

14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK, \*1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983), 8(1987).
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語(1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, No.1(飯島 茂, 日本からみた“Thailand: A Loosely Structured Social System.” 1981), No.2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, Vol.1, Nos.1~2, (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol.3, No.1(*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No.1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), \*No.2(AWASTHI, Suresh, *Drama: The Gift of Gods—Culture, Performance and Communication in India*, 1983), \*No.3(NAGASHIMA, Y. S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica—A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*, 1984), No.4(AND Metin, *Culture, Performance, and Communication in Turkey*, 1987), No.5(OCHIAI, KAZUYASU, *Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America*).
19. *Nationalism in Asia and Its International Relations*. No.1(*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985), No.2(*アジア政治の展開と国際関係*, 1986).
20. 象徴と世界観研究叢書, No.1(高知尾 仁, 球体遊戯, 1986), No.2(橋本裕之, 春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー, 1986).
21. 南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究, 1(柳沢 悠, 水島 司, 20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動, 1988), 2(KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as revealed through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, 1988), 3(KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as revealed through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, Part two (Appendix III), 1989).
22. 第三世界の大众文化の研究, 1(原 忠彦, インド・マンガの世界観序論, 1988).
23. 多民族国家における異化・同化形態の比較研究：マレーシア社会論集, 1(1988), 2(1989).
24. A Comparative Study on the Modes of Inter-Action in Multi-Ethnic Societies: Monograph Series, 1 (FUJIMOTO, Helen, *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*, 1988).
25. AA 研東南アジア研究, 1(世紀転換期における日本・フィリピン関係, 1989), 2(東南アジアのナショナルリズムにおける都市と農村, 1991).
26. イスラム圏における異文化接触のメカニズム——市の比較研究——, 1(1989), 2(1991).
27. 辞典編纂, 1(1989), 2(1990), 3(1991).
28. 言語文化接触に関する研究, 1(1989), 2(侯 精一, 晋語平遙方言分類語汇, 1990), 3(杜拉爾・敖斯爾・朝克, エウンキ語基礎語彙集, 1991).
29. *Annual Report on CHL-ILCAA Joint Research Project*, 1(1990), 2(1991).
30. 水島 司, 18~20世紀南インド在地社会の研究(1991).

### 外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay Texts and Translations*, 1982.
2. EL-ARABY, S. A., *Intermediate Egyptian Arabic—An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的内蒙古(一), 1985.
4. 馬真ほか, 西南官話基本文型の記述, 1986.
5. DOWNS, J. F., *Tibetan Pilgrimage*, 1987.
6. 賀 巍, 漢語方言文稿集, 1987.
7. 李 榮, 渡江書十五音, 1987.
8. 侯 精一, 晋語研究, 1989.
9. 照那斯因, 八思巴字和蒙古語文獻 I 研究文集, 1990.
10. 照那斯因, 八思巴字和蒙古語文獻 II 文獻匯集, 1991.
11. Pan Hla, Nai, *The Significant Role of the Mon Version Dharmaśāstra*, 1991.

## Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W. & 'Abd al-Raḥīm., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study—1977*.
8. M. Salah Ahmed, HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告2—, 1979.
10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lāri Basic Vocabulary—Lārestāni Studies 1—*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary, an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic—*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn (D. 1139 A. H./1727 A. D.)*, Vol.1(Arabic Text), Ed. & Notes, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (I)—Texts in Somali [1]—*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (I)—Texts in Egyptian Arabic [1]—*, 1982.
19. BELLAKHADAR, J., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt—From the Field Notes on the Coptic Monks' Life—*, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan—Her Şeyi İle 'Tarihi Yaşatma Denemesi'—*, 1984.
22. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn*, Vol. 2, *Annotations and Indices*, 1984.
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-determination, Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development—A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDULSALAM, A., *The Rural Geographic Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region: A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDULSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.
26. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (2)*, 1985.
27. BAŞER, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*, 1986.
28. USMANGHANI, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*, 1986.
29. NAKANO, A., *Comparative Vocabulary of Southern Arabic (Mahri, Gibbali and Soqotri)*, 1986.
30. KAMIOKA, K., RAHBAR, A. & HAMIDI, A. A., *Comparative Basic Vocabulary of Khonjī and Lāri—Lārestāni Studies 2—*, 1986.
31. 家島彦一, *Arwād 島——シリア海岸の海上文化——*, 1986.
32. TAKESHITA, M., *Ibn 'Arabī's Theory of the Perfect Man and Its Place in the History of Islamic Thought*, 1987.
33. HAYASI, T., *A Turkish Dialect in North-Western Anatolia—Bolu Dialect Materials—*, 1988.
34. PARSINEJAD, I., *Mirza Fath Ali Akhundzadeh and Literary Criticism*, 1988.
35. SATO, T., *The Syrian Coastal Town of Jabala—Its History and Present Situation—*, 1988.
36. 家島彦一, 上岡弘二, イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート, *IRANIAN STUDIES 1*, 1988.
37. 上岡弘二, 羽田亨一, 家島彦一, ギーラーンの定期市——1986年度予備調査報告——, *IRANIAN STUDIES 2*, 1988.
38. HAKAMI, N., *Pèlerinage de L'Eimām Rezā—Etude Socio-économiques—*, 1989.
39. HONDA, G., MIKI, W. & SAITO, M., *Herb Drugs and Herbalists in Syria and North Yemen*, 1990.
40. OHTA, K., *The History of Aleppo—Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shiḥna—*, 1990.
41. Raouf Abbas Hamed, *The Japanese and Egyptian Enlightenment—A Comparative Study of Fukuzawa Yukichi and Rifā'ah al-Taḥṭāwī*, 1990.
42. YAMAUCHI, M., *The Green Crescent under the Red Star—Enver Pasha in Soviet Russia 1919–1922*, 1991.

## African Languages and Ethnography

1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- \*2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Fêrôôé du Diamare Maroua et Pétété*, 1976.
4. EGUCHI, P. K. (tr.), *Shi'r al-Tûba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulôé du Plateau de L'Adamaoua au XIX<sup>e</sup> siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue-Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIX<sup>e</sup> Siècle*, 1982.
15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.
17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foubina*, 1983.
18. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.
19. KAJI, S., *Deux Mille Phrases de Swahili Tel Qu'il Se Parl au Zaire*, 1985.
20. MOHAMMADOU, E., *Traditions D'Origine des Peuples du Centre et de L'Ouest du Cameroun*, 1986.
21. EGUCHI, P. K., *An English-Fulfulde Dictionary*, 1986.
22. MOHAMMADOU, E., *Les Lamidats du Diamare et du Mayo-Louti au XIX<sup>e</sup> Siècle*, 1988.
23. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central Vol.1*, 1990.
24. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central Vol.2*, 1991.

## Sudan Sahel Studies

1. TOMIKAWA, M. (ed.), 1984.
2. TOMIKAWA, M. (ed.), 1986.

## African Urban Studies

1. HINO, S. (ed.), 1990.

## Bantu Vocabulary Series

1. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language*, 1987.
2. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nkoya Language*, 1987.
3. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lungu Language*, 1987.
4. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lenje Language*, 1987.
5. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nilamba Language*, 1989.
6. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Pare Language*, 1989.

## Bantu Linguistics (ILCAA)

1. *Studies in Zambian Languages*, 1987.
2. *Studies in Tanzanian Languages*, 1989.

## Boucle Du Niger

1. KAWADA, J.(ed.), 1988.
2. KAWADA, J.(ed.), 1990.

## Monumenta Serindica

1. IJIMA, S., (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. J., (compl.) *The Newari Language—A Classified Lexicon of Its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas—*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies I*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Map—The Kingdom of Nepal*, 1983.
12. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M. & NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal II*, 1984.
13. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya—Development in Mountain Environment*, 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language: A Working Outline*, 1985.
15. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y. & HOSHI, M., *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*, 1986.  
SHARMA, P. R., 三瓶清朝, 山本勇次, ネパールにおける言語・文化・社会の動態, 1986.
16. SUN, J. T. S., *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan: Ndzorge Šame Xyra Dialect*, 1986.
17. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Bhutan: Development amid Environmental and Cultural Preservation*, 1987.
18. EINO, S., *Die Cāturmāsya Ode die Altindischen Tertialopfer Dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und der Śrautasūtras*, 1988.
19. SUW, T., *Two Essays on the Formation of the East Asian Ethnic World*, 1989.
20. FINCHER, J. H., *Chinese Democracy—Statist Reform, The Self Government Movement And Republican Revolution*, 1989.
21. SEKINE, Y., *Theories of Pollution—Theoretical Perspective and Practice in a South Indian Tamil Village*, 1989.
22. SHIMA, I., *A Newar Buddhist Temple Mantrasiddhi Mahāvihāra and a Photographic Presentation of Gurumandalapājā*, 1991.

## Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Peruvallanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的変容——アパドゥライ村の土地所有関係を中心にして——, 1981.
4. SUBBIAH, S.; MIZUSHIMA, T. & NARA, T., *Socio Economic Studies of Two Villages; Mahizambadi and Neykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*, 1982.

## Socio-cultural Change in Villages in India

1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983.
2. *Modern Period* No.1 (HARA, T., MIZUSHIMA, T. & NAKAMURA, H.), No.2 (YANAGISAWA, H.), 1983.  
No.3 (KOMOGUCHI, Y.), 1984.

## Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

1. HARA, T. & UMITSU, M., 1985.
2. FAROUK, A., 1985.
3. TANIGUCHI, S. & SATO, H., 1985.
4. ISLAM, S., 1985.
5. CHOWDHURI, A., 1987.
6. TANIGUCHI, S., 1987.
7. SATOH, T. & UMITSU, M., 1987.
8. FAROUK, A., 1987.
9. MOHSIN, K. M., 1990.

## South Asian Monograph

1. KAWAI, A., *'Landlords' and Imperial Rule: Change in Bengal Agrarian Society C 1885-1940*, Vol.1, 1986, Vol.2, 1987.
2. 水島 司, 南インド在地社会の研究, 1987.

## AA-Ken Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.
3. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Social and Festive Space in the Caribbean: Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, Vol.2, 1987.

## 一般研究出版物

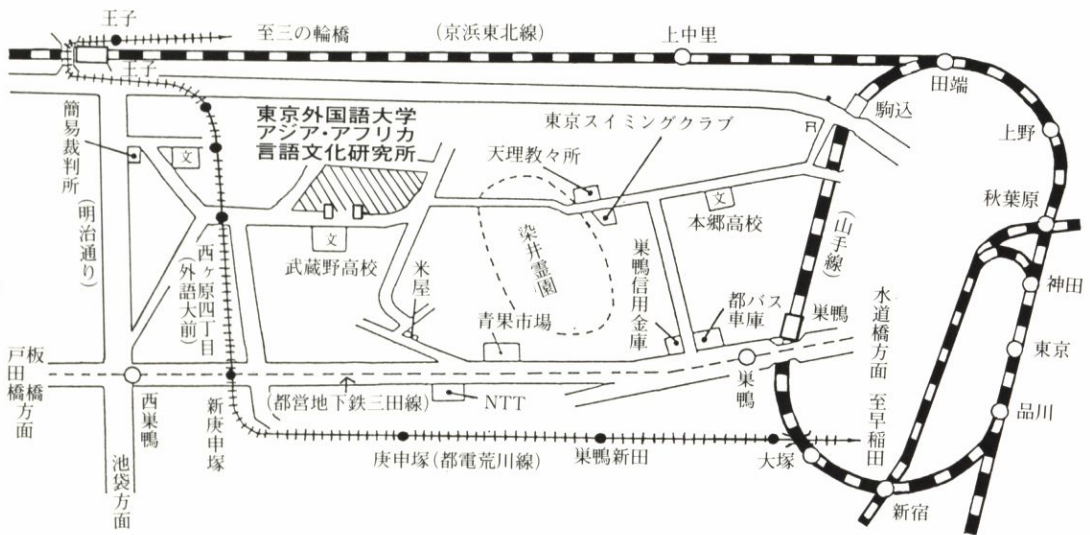
湯川恭敏, サンバー語動詞のアクセント, 1983.

## コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二 (1984).
  - \*2. FONTMAKER (文字フォント作製・修正) 今井健二 (1985).
  3. BUNPOO (文法: 文字コード変換) 今井健二 (1982).
  4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二 (1985) [廃版]
  5. AATEDIT (各種言語テキストエディタ) 今井健二 (1985) [廃版]
  6. 辞書検索表示プログラム 松下周二 (1986).
  7. TEDIT (フルスクリーンテキストエディタ) 今井健二 (1990).
- 別冊 文字フォントリスト1 (1991), 2 (1988), 3 (1990), 4 (1991).

## アジア・アフリカ言語データシリーズ

1. 坂本恭章編, 近世アンコール碑文—KWIC 索引, 1986.
2. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (1)*, 1987.
3. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (2)*, 1988.
4. SAKAMOTO, Y., *Austro-Asiatic Series—Khmer (2)* CBAP SREI, 1989.
5. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (3)*, 1991.



アジア・アフリカ言語文化研究所  
東京外国語大学

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114  
TEL 03-3917-6111 (代)  
FAX 03-3910-0613

JR大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原四丁目  
(外語大前) から徒歩5分  
地下鉄・都営三田線西巣鴨下車10分

